慶應義塾大学学術情報リポジトリ

Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	慶応義塾図書館蔵『新編覆醤集』について
Sub Title	
Author	林, 望(Hayashi, Nozomu)
Publisher	慶應義塾大学藝文学会
Publication year	1977
Jtitle	藝文研究 (The geibun-kenkyu : journal of arts and letters). Vol.36, (1977. 3) ,p.208- 221
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	森武之助教授退任記念論文集
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00072643-00360001-0208

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって 保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

慶應義塾図書館蔵 『新編覆醬集』について

林

望

現在慶應義塾図書館に所蔵する『新編覆醬集』八冊は、 通行の延宝四年刊本に比して、幾つかの興味ある特異性を有するので紹介す

最初に書誌を掲げる。

る。

①寸法、タテ二十六・七糎×ヨコ十七・九糎。

⑵装釘、丹色菊花紋空押行成表紙(改装)。浅葱色包角。美濃紙袋綴。第三冊以下各冊表紙左肩に原題簽。

また各冊表紙中央に墨書目録外題貼付。天地断截あり。

第一冊。序、年譜、凡例、正集目録。 ③構成。全八冊。内七冊印本。一冊写本。

第二冊。正集巻一~巻四。

第三冊。続集序、続集目録、続集巻一及巻二。

第四冊。続集巻三~巻七。

第五冊。続集巻八~巻十二。

— 208 —

第一、二冊は書題簽(後補)。

第七冊。附録目録。附録巻一~巻三。

第八冊。拾遺(写本)。

4題簽。子持枠隷題

第一冊・第二冊。「新編覆醬集」(書題簽)

第三冊~第六冊。「新編覆醬續集

第七冊。「新編覆醬集附録」

第八冊。「新編覆醬續集」

(5) 内題

<正集>「新編覆醬集(巻之一~巻之四)」

※「拾遺」には目録は無いが、前三者については、目録大題は内題に同。

<續集>「新編覆醬續集(巻之一~巻之十六)」。<附録>「新編覆醬續集附録(巻之一~巻之三)」<拾遺>「新編覆醬拾遺」

(6) 尾題

<正集>序、年譜、凡例、なし。目録「新編覆醬集目録終。」本文「新編覆醬集巻之一(~四)終」。<續集>序なし。目録「新編覆

醬續集目録終」。本文「新編覆醬續集巻之一(~十六)終」。 ただし 巻三、四、十四、十五の四巻は巻付の「之」字なし。

<附録>

目録―なし。巻一「新編覆醬續集附録巻之一終」。巻二「新編覆醬續集附録二終」。巻三「新編覆醬續集附録三之巻終」。 < **/ 拾遺** >

なし。

(7) 柱刻

<正集>序「新編覆醬集

年譜第六第七、及び凡例第一第二の計四丁は「新編覆醬續集」に誤る。本文「新編覆醬集「巻一(~四)(丁付)」<續集>序、目 総序(序・後序)(丁付)」。年譜、 凡例、 **目録「新編覆醬集** 年譜(凡例、目録)(丁付)」※ただし、

付)」。巻一「新編覆醬續集 録「新編覆醬續集 序(目録) 附録一」※ただし第五丁~第八丁巻付の「一」を欠く。巻二「新編覆醬續集 (丁付)」。本文「新編覆醬積集巻一(~十六)(丁付)」。<附録>目録「新編覆醬積集 附録巻二」。 巻二「新編 附目録

(8)版式。四周単辺。無界。匡郭寸法二十・三糎×十三・七糎(第一冊首丁オに於て) 覆醬續集 附録巻三」※ただし第九丁~第十二丁(大尾)は巻付の「巻」字なし。<拾遺>「新編覆醬集 巻」(巻数丁数なし)。

(9)行格(「拾遺」に就ては別に掲げるので略す。)総序、毎半葉五行各行十字。序(昌三)毎半葉六行各行十三字。 (三竹) 六行、十四字。後序、六行、十二字。年譜、九行、十八字。本文(含目録、凡例) 十行、二十字。 (以下略記する)

(10)刊記 なし。

(1)印記

第一冊、第二冊、第八冊の首丁ォ「幽軒」(白文)「主人」(朱文)朱連印 各冊首丁オ「北固山/西源禪院/卍字堂」木瓜形朱印。「慶應義塾圖書館印」方形朱印。第二冊,第七冊,第八冊首丁ォに「桂春書室」方形朱印

(12) 識語等

第一冊目録奥に「明治七年甲戍五月偶入鄽之次此集八冊有書肆一見而求焉/現桂春璊月山叟誌之/回 回」(上印は「緇門/慧璊.

白文方形朱印。下印は「月山」朱文方形朱印。)

また第一冊表紙見返しに 「讀石丈山集」 と題する林鵞峰の七絶一首を貼付けてある。 更に、 附録巻三(第七冊)十一ウの余白に |護石丈山集」(右に同じ作)並びに 「石丈山乗ム牛圖」 と題する林鵞峰作二首を墨書してある。 ただしこの附録巻末書入の方は

「拾遺」の筆者と同筆にかかるものと認められる。

(13) その他

句点、朱引を施してある。これと同じと見られる朱墨を以て、正集の一部眉上に評語等の書入れがある。これを第二朱とする。こ 全巻(除「拾遺」)に汎って朱筆を以て処々訂正してある。 これを第一朱とする。 これとは別の朱筆で全体の可成な部分について

れらとは全然別の第三朱もごく稀に存するが、これは漢字の音訓等を示すに止まり、 特に論ずるには及ばないであろう。

第二朱については以下に詳述する。

本書々誌は、右の通りであるが、今本書の特異点を整理すれば、次の三点に集約されようかと思う。

- ₩ 無刊記である
- (1) 朱筆書入れ
- 三 『拾遺』なる写本の存在

右の三点を以て、本書の他本に比しての著しい特異性を認め得るのである。以下條々これを述べる。

け無刊記であること。

て同板と認められる。そして、これら通行本は『附録』巻三の巻尾に「延寶四丙辰歳三月吉旦刊行」という刊記が付けられてあるが、 通常『新編覆醬集』は、縹色若しくは香色表紙を原装とする十四冊を以て行われているのであって、管見の限りでは(*注①)すべ

今本書に於ては、この刊記が無く、その位置に尾題が存する。これは通行本には無いものである。これは、本書が刊行本でない為に生 じた特異点である。即ち、結論からいえば、本書は刊行に先立って版元に於て校正の為に試印された下刷本である。それを證明するも

『拾遺』筆者による加筆であるらしい。今、この二者に就て一々截然と区別するのは仲々難事であるが、比較的明白なものについて校正 のは、校正の朱筆の存在である。前述の如く、本書には主たるものとして二種の朱が加えられてある。その一は校正朱であり、

朱であると見られるものは全部で少くとも二三七ケ所に上る。これらの内には、校正箇所を朱で訂し、尚眉上に○印又は何らかの校語 については直っていないが、残りの二一七ケ所については、通行の刊本に於て朱筆の通りに訂正がなされているのである。一例を示せ を書入れたものが多いが、或は行間、欄脚に○印等を附したもの、全く無印のものなどを含んでいる。これらの訂正のうち、二十ケ所

ば、凡例第一丁柱刻に「新編覆醬續集」と誤ったのを、朱で「續」に〇を附して眉上に「集」と校語を記している。刊本「新編覆醬集」

指定してあるが、刊本では、神君以下埋木をして行を改めている。 に直っているのを見る。或は、年譜第九丁ウ七行目に「此−役神君應下」とある役の下に○を附し、眉上に「神君ゟ上ヘアグベシ」と かかる例を見るが如くである。この一事を以て本書が上述の如き性

格のものであることを證するに足るであろう。即ち、この校正刷の段階では刊記はなく、そこに尾題が刻されてあったのを、

して尾題を削除して、刊記を入木したものと見える。

本書は天地断截があるが、これは相当早い時期に施されたものであろう。二種の朱の内、第一朱校正朱の方は時に上部を欠くこ

とがあるが、第二朱の方はそうしたことはない。これを思うに、版元の手から校正済の試印本が第二朱筆者の手に渡る段階で天地を断

落ち、(この人物に就ては、 その何人であるか今の所不詳である。) 結句本塾の書庫に入ったものである。 尚付言すれば、 は、ごく最近に施されたものであると認められる。(「幽軒」「主人」の如く読みなされる連印の主に就ても今知るところがない。) かでないが、とにかく龍安寺塔頭たる西源院の蔵書となっていたものが、近代に入って識語の筆者「現柱春瓗月山叟」なる人物の手に って製本したものであるらしい。そして、この第二朱筆者の手で『拾遺』一冊が付加されて、その後如何なる経路を辿ったものか明ら 現在の装釘

212 -

に就ては後で詳しく述べるが、 扨、第二朱による眉上及び行間の書き入れに就てであるが、これは筆蹟よりして「拾遺」筆者に同筆と認むべきものであろう。これ 筆者は石谷清成という人物である。 第二朱による句点朱引は続集にも散見する所であるが、

口書き入れに就て。

れはその対校に用いた異本が何であるかを考えてみる必要があろう。ここに『新編覆醬集』に先立って二巻本『覆醬集』というものが とあるのみで詳らかなことは分らない。)といった名前が見えている。 この外、稀に典拠を示す注記も存する。 者としては、陳元贇、黄檗山僧(法名を明らかにしない。)林羅山、菊軒(これは恐らく朝鮮学士権侙であろう。)雪堂董蓊(長崎羈客 批點、略注、改竄、校異、などの書き入れは、正集の全四巻に限られる。内容は丈山の詩篇に対する批評が主なものであって、 次に校異であるが、こ

十二首は『新編覆醬集』編纂に当って採用されていない。 然して 残余の三百四十一首は『新編覆醬集』の『正集』巻一~巻四、 ある。『覆醬集』全二巻は、寛文十一年、未だ丈山在世中に刊行されているが、この二巻本に収められている詩篇三百五十三首のうち、 る。この改作改題が丈山自身の意になるものか否かは今俄かに断定し難いが恐らくは丈山の意志であったろう。ともあれ、この慶應義 『続集』巻十六に収録されてあるが、この両刊本を比較すると、その可成な数の作品が改題若しくは改作されているのを見出すのであ

(三拾遺に就て、

塾蔵本に「異本」として校異を示してあるのは、この寛文十一年刊本であろう。

これは他の印本と甚だ性格を異にする写本であるから、今改めて独立に書誌を掲げる。

寸法・装釘は印本に同一。題簽「新編覆醬續集」(刷題簽)。目録外題「覆醬續集/拾遺」(書外題)。

匡郭寸法二十・六糎×十三・九糎)。行格、叙・毎半葉六行各行十三字。凡例及本文・毎半葉十行各行二十字。全紙数四十八丁。内墨 し。四周単辺。無界。板心「新編覆醬集 巻」(匡郭及び板心は本集に同じ木板刷である。但し 柱刻に巻付及び 丁付の数字はない。

文・方形朱印)の各印が捺してある。筆蹟は二筆である。叙から四十丁表七行目まで第一筆。以下四十丁表八行目から四十一丁表 /之印」(朱文・方形朱印。)「子方/父」(白文・方形朱印)、又同じく凡例の末に「埜直/之印」(白文・方形朱印)「子方/甫」(白 付四十一丁。巻頭遊紙一丁。巻尾六丁は匡郭板心のみ存する白紙。前の書誌に記載の諸印の他、本書には叙文末署名に添えて「埜直

されているところが散見する。全篇に朱墨を以て 句点、朱引、校語、批圏を施す。これも 第一筆と同一筆と認められる。(ただし、 行目(大尾) まで第二筆。 全篇に汎って訓点附。処々第一筆による語註が眉上に存する外、 主に人名などの略注が第二筆によって施

巻尾第二筆の処は、朱引あるも別朱。

序文を左に全文掲げる。

内題「新編**覆醬拾遺**」。

尾題な

之-清-律(詩-聯也、文-章也、手-簡也、筆-談也、随、見随、聞、無\不、掇"輯之(逾)月歷\歳、簡-編成\堆、足"以為"詩之軌-範、丈之-清-律(詩-聯也、文-章也、手-簡也、筆-談也、随、見随、聞、無\不、掇"輯之(逾)月歷\歳、簡-編成\堆、足"以為"詩之軌-範、丈 誠天-縦之才-調、間-出之豪-雄也、其証往-年朝-鮮瞍-使詩-學教-授権菊-軒穪以為二 日-本之李杜、外-國之-人推-奨若、是、誰爲 杜-園' 滌',筆于欧-瀾蘇-潮'、而共不',多-讓,者、中-葉以-(3ォ) 來唯丈-人而-已、且-又擢',隠-逸之秀于扶-桑',揮',著-述之美於中-華', 點-鼠塗-抹,者、抵、死不、休、是_以、篇-々什-々、意-周、而語_諄也、(2ウ) 秀-逸之奇-句、警-抜之確-對、往-々得:其妙、全令: 其著-作,知:李杜之精-妙,而用:李杜之精-妙,間有下不,満:其意;者:不,許:佗之電-矚,一-句一-字辨-擇推-敵,而至:句-鍛月-錬 丘-園之-逸-老也、非*所-謂與:(贋-隠偽-隠;同-日之-談4也、丈-人天-性嗜:(2オ)詩賦、花-晨月-夕、感:時-序;摸:風-景、恒所: 款:瀬-見-小-河之-和-歌一-首;以-降、再不_渡:鴫川;再不_入;雒-邑;者、二言十-稔于茲; 時-人貴;其曠-達; 嗚-呼是希-代之真-隠; 以『潛-退』為『志-操,從『耳-順之-歳,巖『棲台-麓之一-乗-寺,杜չ扉謝ゝ客,唯仙-境(1ウ)静-儉高-尚、而以自-居、古-希之-比、 **嶠隠--土徴-君石丈-人者、爲5人剛-直、而自有-偶-儻非-常之-標、素不5娶-妻妾,不5媚-権-貴,不5好-華-麗,不5接/塵-常、實** 獵祖-述之-勤、尤、踈-也、故益<〜擇而取言舎 こし、則詩乖言格-律「文匪」 純-粹「而悉(1オ)不」足」爲5法、何可5 不」擇之哉、 台-獲相-述之-勤、尤、 *** 無言斧-鑿之-痕言後-来擬-作者誰髣言幫丈-人言所-謂清-詩要言為-錬-乃得言鉛-中銀言者、 余於言丈-人言見之之、 是-以、平-生跂言歩於李-庭。 (4ウ)以蔵:『于家塾』之寫-本』参言互校-訂《之、則詩簡共漏』於新-刻-本,者数-十-篇、於5是、余惜』其有:「殘-缺、憾"其不"總-集(4) -人没-後門-生(4オ)石-子-復編=纂發-藁「號」覆醬總集「頃-日鳩-刻既-成、 寔不-朽之盛-事也、 鳴-呼子-復此撃、可」謂於:[師之-業]

逐-次積-累 以充"、拾-遺之-数"、則豈啻丈-人之素-志而-已-哉、 詩-林之美-譚可"併-想"矣、 時延寶四年 歳舎丙辰 仲秋上澣禮尚堂人

拾||其遺||採|||其餘|| 乃起||摘||補之||筆|| 以為||一-小-策||附||其後|| 名曰||覆醬拾遺|| 自||此以-往、毎||有||一文一-詩索-出得-(5オ)者||

印即

賦文-草等、無|舊稿|者多-々、余今無」如-之-何|惜-哉、故略餘||数葉||以連-々欲||追-加||也、従-來幸巻-尾良-盈、則可[脩||檀々集||以東-々歌||追-加||也、従-來幸巻-尾良-盈、則可[脩||檀々集||以東-マ歌|| 継•子復之編-思」此在」茲」とその意氣の壮なる処を述べているが不幸にして、遂に本篇の巻尾盈つるを得なかったこと現在見る通りで 脱漏せるものが少くない。そこでこれを惜んで『拾遺』を編む、というのである。尚、凡例を見ると、「丈-人少-壮之時、所չ作之詩-よって『覆醬總集』(『新編覆醬集』のことであるが、或は書名初案か。) が 刊行された。 これを自分の家塾に蔵する写本に比校するに して、その作物を何によらず収集して居った処、今や一つの堆を成す程になった。ところにこの度石克子復(通称石川孫十郎)の手に (右文中一部仮名を改めた。例えば「ソ」→「シテ」、「圧」→「トモ」の如きである。)これを要するに、 自分は年少の頃から丈山に私淑

その題下に註して曰く「一名直字子方稱"松洞"親衛校尉貞清土-入-翁之適-孫也」とある。(尚、序文末にこの所を引用した全然別筆の 付箋が附せられてある。)今『寛政重修諸家譜』によって、系譜並に略伝を示すと次の通りである。 この**埜**直子方なる人物は本名石谷清成というのである。『新編覆醬續集』巻六ノ八オに「酬fi答石谷清成所ュ寄」と 題した一篇があり、

右の叙文等の執筆者埜直子方なる人物が本書の筆者(第一筆)であって、本書はこの子方の自筆稿本であろうと認定し得る。然して

。巻八百九十・八百九十一

2谷(藤原氏爲憲流)

邨

(女子は省略)

清成「三大夫。萬治二年八月十三日はじめて厳有院殿(家網)にまみえたてまつる。時に十一歳。元祿二年八月五日父にさきだちて

死す。年四十一。妻は榊原左衛門職信が女。後妻は稲垣信濃守家臣稲垣十左衛門重章が女。」

即ち江戸初期の江戸町奉行として歴史上にその名を留めている土入石谷貞清の孫に当るわけである。

『續集』巻六に、丈山が清成に酬答した一首は次のようなものである。

珠-玉揮、毫暉、老-眼、 研-覃可、勉少-年-時

後-來欲**克兼:(文武) 武-看張華勵-志詩

く『續集』巻九に「挽石谷宗淳居士序」と題する比較的長文の挽詞を寄せているのを見ると、文山とこの石谷氏との浅からぬ交情が窺 貞清やその兄清正と旧知であった。その関係で清成に対しても、恰かも孫に対するが如き慈味掬すべき一首を贈ったものらしい。同じ かる作物の存在よりして清成が丈山に私淑しつつその作品を蒐輯したという理由は頷かれるのであるが、もともと丈山は、清成の祖父 前後より推して、この作は寛文四年の正月頃に作られたものと考えられる。時に丈山八十二才。清成はいまだ十六才の少年である。か

-中膠-漆之堅、疇容二 誇-吻:爲云々 -十-年-所、中-間扈言従「莫-府1移-居駿陽、接」閻「鄰」舎 相-去・歩-武、牆-屏有」蹊往-來無」時、平-生之懽不」作言其-意、金-蘭簿

われる。曰く

地-哉云々」と石谷氏に会えなかったことを残念がっている処が見える(六オ)。この書簡は年月明らかでなく、又右の「石谷氏」が誰 又、この外にも、たとえば『續集』巻十四の「答言埜静軒i」(野間静軒あて書簡)の中に「(上略)石谷氏來」洛不」知何_日哉、宿-處何」、 である。 無論、この類の文章特有の美辞麗句も入ってはいるであろうが、 彼等が決して浅い交りでなかったことは 確かであろう。尚 これは、清正に就てその好誼を叙した部分であるが、この後の処で弟貞清にも少なからぬ紙幅を割いてその武勇功業を称賛しているの

であるかも判然としないが、いづれにせよ、清成に近い縁のあるものであるに違いない。

これはそのままには信ぜられまい。按うに、清成自身必ずや何らかの形でこの出版事業に関与していた筈である。さなくば何故校正用 りとは思われない。然して清成は本集の刊行を指して「寔不-朽之盛-事也」などと言い、恰かも他人事の様に持てあつかっているが、 也、文-章也、手-簡也、筆-談也、随、見随、聞、無、不、掇゙輯之、逾、月歴、蔵、簡-編成、堆云々」と述べたのは、決して大げさな言いぶり、文-章也、手-簡也、筆-談也、随、見随、聞、無、不、扱゙輯之、 :かる環境にあり、 また未だ少年の身でありながら丈山大先生より親しく詩賦を贈られた事もある清成が、 先の叙文の中で「詩-聯

ては、その間の詳らかな事情は知るに由ないが、清成が丈山にとっては或種の弟子の如き人物であって、しかも厖大な資料を有してい の試印本が彼の手に落ち、又、匡郭と柱刻を本集と同じくする料紙を用いて『拾遺』の如き稿本を編むことが出来たろらか。今となっ

たとするならば、彼が編纂スタッフの一員であったと考える方が寧ろ自然であろう。

安寺の一塔頭であって現在までその名号は存するのであるが、然し、現在の西源院はもと冝春院と称していたものであって、往時の西 私は、ここに「北固山/西源禪院/卍字堂」の印形の有るを怪しんで、何か関連がありはせぬかと考えた。この北固山西源院は、

も無いことは致し方ない。(*注②)結局、清成と本集の刊行との関係については 未だ詳らかにしないが 右の推定は大方誤りないであ 源院は廃寺となり、保存せる資料等も昭和三年の火災に遭うて灰燼に帰したとのことである。従って、この方面については今や知る術

扨、この『拾遺』に収められてある内容について述べておきたい。整理すると下の如くである。

(小詩篇 七十三首

篇の異伝(若干の異同がある)などが含まれる。 この内には「或云大拙翁詩、出扶桑雑記」と註されてある二十四首、 また巻尾別筆の「洛東八景」、 或は印本の方に見えている詩

卯書簡 二十九篇

(a)林羅山、菅玄同、 武田岌淵、 吉田素庵ほか数人に宛てた書簡二十七篇

— 217 —

竜

(b)『**綾**集』に既に収載された書簡文中の脱漏を補う断章二篇

(八林護耕済による丈山詩篇の評文十五章

也。」と断ってある。ただしこの詩評は『讀耕先生全集』(*注③)の『讀耕林先生外集』巻十九として既に梓行せられて居たもの 載…之本集、今又難、似…重-出、然間文-字異-同、且-又、品-評之-詳、批-點之與…埜-静-軒,有:異-同、 為:使.見-者優-劣着・眼***** | 東、東、東、東、東、東、東、東、東、東、東、東、東 これはすべて『續集』巻二所収の詩に就て讀耕斎が評したものであるが、 これについては凡例で「讀-耕林-子所」評之十五首、已

である。

(二詩の断句 三条

この内には、 年譜中にも誌されて夙に有名な「白-鷗不」停三野-水二 や「欲ヒ将三簑-衣|曝=返-照4、釣-竿還_是魯陽戈」などが含ま

れる。

动和歌 五首

この内には、長頭丸の作一首、木下長嘯子の作一首が含まれる。余三首は丈山作

へ和文一篇

最風流のわさなんめり。 は去人か来訪の次てに書写して推ぬとて名はいはれぬほとに先生の作にもやと思ひ書付ぬ」と前書きがあり、 これは「先生燕居の西壁に凸凹窠十二景を倭文に書て貼してあり。誰か作をしらす。潜に騰写して帰りぬ。或日先生の作かと問 なり」と書き加えてあるもので、凸凹窠十二景を和語にやわらげて折込んだ擬古的雅文である。 背の山人の作と云人もあり。いつれか是なる事をしらす。野間氏にとへともしらぬといひ、平岩氏も同前 なお後書に「とあり

小その他

「題」明石神廟壁」」一「辛未正旦試毫銘」一

「迂;海-嶋;辞」一篇

「詩法正義跋」一篇

况-又、流--落於世-間 | 者、往-々捜--索他-方 | 以欲\ 増 | 補 之\、、則不\能||更以\類分▷之、詩文和歌共混-|雑拾-遺之中、見-者其擇\之|| 『拾遺』中の作品を整理すると右の通りであるが、これらが凡例で「拾-遺編-纂之例、 不ゝ「詳-其年-月、 則不ゝ能**今悉定-次-序・、

と断ってある如く、混然一書を成しているのである。今、このうちの詩篇について一言付言する。

東新門跡之別館二 と註されている(注米④)ところをみると東本願寺に関係したことであろう。大方の御示教を乞うものである。然し 物一首。印「皆山亭」関係のもの六首。 臼その他五首という様に分類出来る。 右の「皆山亭」についてはよく知らないが「皆山亭曰: 編覆醬集』には採られていないこと前述の通りであるが、この不採用の十二首の性格を檢するにイイ権侙以外の朝鮮使節(金東濱)の作 丈山生前の刊行にかかる寛文十一年刊二巻本『覆醬集』には総数三百五十三首の詩篇が収められてある。そしてその内十二首は『新

一種中口也

「用:石蜜并梅-花|贈::相国崟長老|戯継:春初之韻]」

て、上の⑴を除く十一首が『拾遺』七十三篇の詩篇中に含まれている。即ち次の諸篇である。

「中元夕入,,本願寺,観,燈-花,

「乙亥中元之」夕在、洛戲、為」

「訪ュ黙ー々ー翁遺蹟こ

「庚寅九-月既-望奉」陪:皆山亭 賞,月」

「皆山亭髙僧新門跡和-章」

「寅再嗣,既-望月-夜之前-韻,奉_酧,答皆山亭之執-事]

「観…皆-山-亭尊公咏、雪之妍-唱;奉…和-呈;」

「辛卯奉」和:皆山尊公元旦之嘉-藻,」

「奉」賡;大-僧-正皆山尊公之歳-首竒-躅;」

ある。校正用下刷本、朱筆書入れ等の存在と合せて御紹介する次第である。 た人物の自筆稿本という形で我々の前に出現した本書は、石川丈山新資料として、それなりの意義を有するものであろうと信ずるので を有する処があることもまた事実である。そして総じてこれを評するならば、少くも丈山と同じ時代を生きて、或る程度の交流のあっ 『新編覆醬拾遺』の性格は概略以上の通りである。本篇の少なからぬ部分が既知の作物であるにもせよ、その中には既知の形と異同

以下余白を借りて幾つかの興味ある作品を掲げる。

。東大梁上人

布-韋合-縫綿-襪二-雙、寅貢:|侍者、不」足」充」信、聊致|微-忱」、菲薄毋」韶;,叱人」是_荷

(これは『續集』巻十ノ七オ十行目「……百不盡一原亮惟祈」とある下に右二十八字を脱しているというのである。)

(同巻十の二オ四行目「……恕幸也又旦」とある下に右三十七字を脱している、というものである。)

風露無5光暗結5愁、起望:初-霽|賞:「中秋」、雲-間此-夜一-輪満、詩-興誰-家有:賞休

(これは『正集』巻二ノ一オ「中秋無月」の詩と同席にして作ったものと注してある。)

冉-々歳-云-莫、数莖白-髪-生、臘共:千里:盡、春自:|五更;迎、竈-裏燃-灯色、門-前竹-爆聲、吾無:|詩可・祭、讀/易到:|天-明|

(これは刊本いずれも五絶に作っているものの異伝で五律に作られているのが珍しい。)

只合"是成"断-袖歓、華容先、露使":"吾嘆、香-魂艷-魄有'知否、泣向"春風"淚未、乾

篇を典拠とすると認められる行文があるので注意している。或は何か他の本に収載されている詩なのであろうか。大方の御示教を得た (これも刊本に見ない作である。門下の寵童を喪った時に詠じたものと見える。尚、貞享三年刊浮世草子『近代艷隠者』巻一ノ⇔に本

管見の及んだもの次の通り。

内閣文庫蔵甲乙二本。国会図書館蔵本。同鶚軒文庫本。宮内庁書陵部本。慶應義塾斯道文庫本。東洋文庫岩崎文庫本。

館加賀文庫本。静嘉堂文庫本。刈谷市立図書館村上文庫本。西尾市立図書館岩瀬文庫本。京都大学図書館本。

島原公民館松平文庫本。

以上十六本。すべて同板と認む。

本。岡山大学池田文庫本。

山口県立図書館本。

*****注② 現西源院住職長谷川玄信氏示教

* 注③ 寬文九年序刊。無刊記古活字本。六十卷三十冊。

寛文十一年板二巻本下巻十三丁ウ。

本稿の調査に当り、貴重なる御蔵書の閲覧を御許可下された許りでなく、 惜しみない御助力を賜った右関係諸機関の方々に心より御

礼申し上げる。本欄を借りて一言申し添える。

昭和五十一年九月

大阪府立中之島図書館

都立中央図書